近世・近代の木彫仏像に施された彩色の技法と色材

山形県下に安置されている諸尊像の事例

島津美子
岡田 靖

Technical Study of Paint Materials in Buddhist Polychrome Wood Sculptures Made in 19th-Century Japan: Summary of Case Studies in Yamagata Prefecture

SHIMADZU Yoshiko and OKADA Yasushi

はじめに
❶調査の経緯と概略
❷色材および技法調査
❸考察
結論

【論文要旨】

江戸時代後期になると、それまで京都を中心に行われてきた仏像の造像活動が、地方においても盛んになる。これらの仏像には彩色が施されていることが多いものの、彩色の調査や色材分析の事例はそれほど多くない。この点に着目し、現在、山形県下に安置されている仏像群の彩色調査を行った。調査の対象は、いずれも一九世紀に造られた彩色の木彫像で、京都七条仏師による作から、その流れをくむ地方仏師らによって造られた仏像群である。

前回の調査において、一九世紀前半の作例一件と明治時代に入ってからの作例二件の色材分析を実施したところ、明治時代の作例にのみ、一部の色で輸入の合成色材が使われていた。本調査では、一九世紀中頃から末期にかけて造られた彩色仏像群九件に使われた色材を明らかにしつつ、輸入色材の種類や導入期などを検討した。明治時代に入ってから造られた尊像にみられる明るめの緑と青には、それぞれ、岩緑青がエメラルドグリーン（アセト亜ヒ酸銅）に、天然藍が合成ウルトラマリンブルーに置き換わっていることが明らかとなった。一方で、色調の暗めの緑では、江戸時代と変わらずに黄色の石黄と藍色の色材が混合されたものが使われていた。同様に、赤や黄といった暖色系の色材も一九世紀を通してほぼ同じ色材が使われている。日本は、一九世紀の後半に諸外国との交易を正式に再開し、江戸時代から明治時代へと変わっていることを考慮すると、こうした社会的な変化が、彩色材料にも影響を及ぼしていたものと考えられる。一方で、他の色材は江戸時代にも使われていたものであり、すでに輸入されていた色材、たとえばプルシアンブルーが単色で使われた例は認められていない。本稿では、色材分析の結果をもとに、一九世紀の彩色仏像に用いられた色材について、輸入色材のみでなく、在来のものも含めて概観した。

【キーワード】彩色仏像、一九世紀、山形県、合成ウルトラマリンブルー、エメラルドグリーン